

## 北海道における軽種馬産地の変化

### Changes in Race Horse Production in Hokkaido

沼田 尚也\*  
Naoya NUMATA\*

キーワード：軽種馬生産，高品質化，国際化，北海道

Key words：Race horse production, quality improvement, internationalization, Hokkaido

#### I. 馬産地形成の歴史的側面

北海道は2000年現在，日本国内で生産される軽種馬の95.0%以上を生産する（図1）。北海道内における軽種馬の産地である日高・胆振・十勝地方は，夏季の最高気温が25℃を超えるものの，酷暑となることは少ない。また，冬季も-10℃以下には減多にならず，さらに雪が少ないなど，馬産地形成の基底条件となる自然環境は，軽種馬の生産・放牧に適しているといえる。

北海道における馬産地形成の歴史をみると，古くは1858年（安政5年）に日高地方の元浦河に幕府直轄の馬牧が設置されている（田林，1998；岩崎，2005）。また，1872年（明治5年）に開拓使により新冠に牧場が開設され（1888年より新冠御料牧場），1907年には内閣直轄の日高種馬牧場が創設されるなど，明治時代から馬産研究施設が開

設されている（進藤，1977；田林，1998）。胆振地方も，1900年代初頭から軍馬育成によって馬産地の素地があった。しかし，軽種馬生産が本格化したのは，軽種馬市場の拡大がはじまる第二次世界大戦後，1948年の競馬法制定以降である。特に1965年以降，高度経済成長に伴って競馬ブームが起き，軽種馬飼養農家が増加した経緯がある（田林，1998）。

北海道の軽種馬産地については，これまでも新藤（1977）や田林（1998）をはじめとして，地理学的な調査が行われてきた。ただし，従来の研究は日高地方における軽種馬生産に焦点が当てられ，他の地域との比較が行われたわけではない。本稿では，胆振地方における動向を視野に入れつつ，北海道における軽種馬生産の変化について，予備的な考察を示したい。

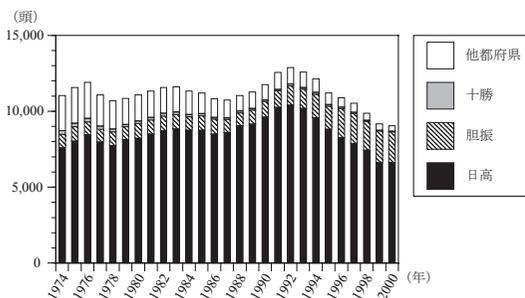


図1 種牡馬供用地域別生産頭数の推移(サラ・アラ合計)

軽種馬生産統計より作成。

#### II. 生産数の推移と地域別の特徴

図1は，1970年代からの種牡馬供用地域別の生産数および地域別の生産割合の推移を示したものである。軽種馬の生産数は，バブル期までは横ばいから微増傾向にあったが，バブル崩壊以後は減少傾向にある。また，1990年代からは，競馬の国際化の下に中央競馬における外国産馬への門戸開放が行われている。さらに，2001年の中津競馬廃止を皮切りに，軽種馬生産を底辺から支えていた地方競馬の廃止が相次いでおり，景気の動向とともにこれらの影響も生産数に反映されていること

\*倶知安町

\*Kutchan Municipal Office

表1 地域別牧場数および1牧場あたりの生産頭数(2003年)

	日高	胆振	十勝	他都府県	全国
牧場数	1107	89	32	240	1468
1牧場あたりの 生産頭数	6.36	12.37	3.22	2.12	5.96

2003年輕種馬統計より作成。

表2 種雌馬飼養規模別牧場数(2003年)

	日高	胆振	十勝	他都府県	全国
1～5頭	411	43	24	197	675
6～10頭	398	18	6	26	448
11～15頭	184	15	1	12	212
16～50頭	109	8	1	5	123
51～100頭	5	2	0	0	7
101頭以上	0	3	0	0	3
合計	1107	89	32	240	1468

2003年輕種馬統計より作成。

がうかがえる。

軽種馬の生産拠点は、ここ30年の間に北海道外での生産数・割合ともに大きく減少しており、1988年以降は北海道のシェアが90.0%を超えている。なお、道内では依然として日高地方における生産数が多い。しかし、1992年を境に、日高地方における生産は減少の一途をたどっている一方で、1992年までは全体の10.0%未満であった胆振地方（以下隣接する千歳市も含む）のシェアが、近年では増加傾向にあり、2000年には全体の22.0%を占めるようになってきている。

また、牧場の規模も地域によって差が生じている。表1は2003年における地域別の牧場数および

1牧場あたりの生産頭数を示している。生産頭数と同じく日高地方の牧場数は圧倒的に多いが、1牧場あたりの生産頭数は胆振地方が非常に多い。これは、胆振地方における軽種馬生産が大規模かつ集約的な特徴を持っていることを示している。これをさらに詳しく示したものが表2である。牧場の規模を端的に示す種雌馬飼養数を元に地域ごとの経営規模をみると、胆振地方には101頭以上の種雌馬を飼養する牧場もあり、大規模な牧場の数・割合がともに高いことがわかる。これは、胆振地方の軽種馬生産が、競馬の国際化への対応を考慮して、経営を変化させてきたことによる。なお、胆振地方には、現在の日本の競馬界を牽引す

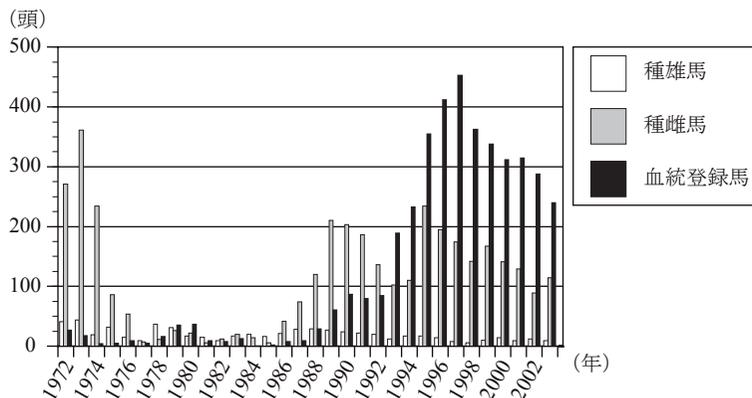


図2 年次別輸入頭数(サラ・アラ合計)  
2003年輕種馬統計より作成。

る社台グループの牧場が点在するほか、メジロ牧場や西山牧場といった大規模な牧場が立地する。

図2は軽種馬の年次別の輸入頭数を示したものになる。これによると、1992年より始まった中央競馬の国際化計画による外国産馬の出走制限緩和以降、血統登録馬（競走用の馬）の輸入が増えていることがわかる。これにより、長らく日本競馬界によって守られてきた日本の軽種馬生産は国際化の時代に入ったといえる。なお、近年、外国産馬の輸入が落ち着いてきた理由としては、景気の変動の他に、国内の軽種馬生産が外国産馬に対抗できる競争力をつけてきたことが考えられる。しかし、その過程で有力種牡馬の保持や高度育成シ

ステムの形成により、大規模牧場と零細牧場という生産サイドの2極化が進展した。

### Ⅲ. 胆振地方の軽種馬生産の高品質化

日本の競馬には、賞金額や出走馬の質が高い中央競馬と、軽種馬生産を底辺から支える地方競馬の2つがある。中央競馬の中で最も格が高く、限られた一流馬しか出走できない、日本の競馬の頂点に立つレースが中央競馬G1レースである<sup>1)</sup>。

図3は、胆振・日高・十勝地方における牧場の立地を示すと同時に、各牧場で生産した軽種馬の中央競馬におけるG1レース勝ち鞍数を示している。これによると、軽種馬生産牧場は、日高地方

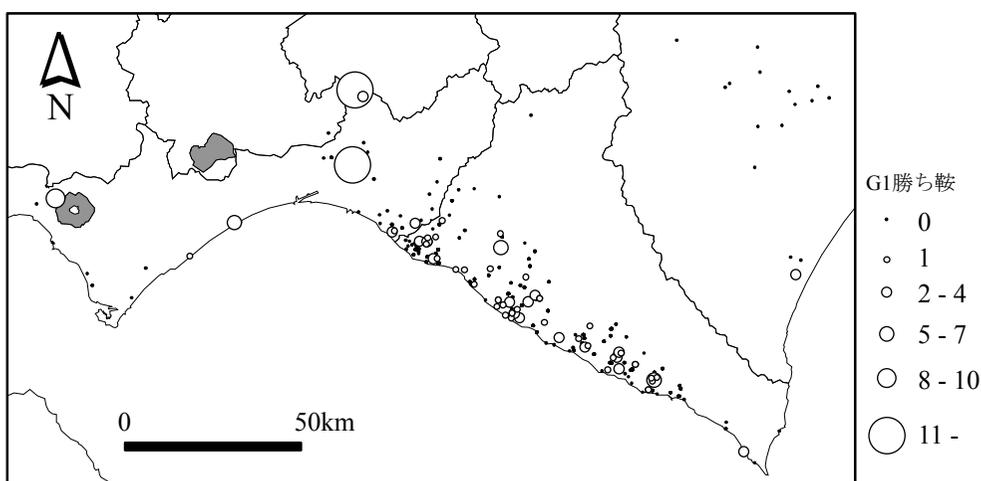


図3 軽種馬生産牧場の分布(2005年)

円の大きさは1996年～2005年の中央競馬G1レースにおけるのべ勝ち鞍数による。  
電話帳、北海道馬産地図、中央競馬会資料より作成。

表3 中央競馬G1レース(1996年～2005年)勝ち馬の地域別生産投数

日高	胆振	十勝	海外 (外国産馬・外国馬)	その他	計
67	59	2	51	1	180

中央競馬会資料より作成。

レース時にG1レースであり、外国産馬が1頭でも出走可能なレースについて集計

表4 地域別種牡馬・種雌馬種付け頭数(2003年)

	日高	胆振	十勝	他都府県	全国
種牡馬数	260	45	15	69	389
種付け頭数	8024	3711	74	494	12303
一頭あたりの種付け頭数	30.86	82.47	4.93	7.16	31.63

2003年輕種馬統計より作成。

に多くが分布するが、胆振地方にはG1レース勝ち鞍数が他と比べて非常に多い牧場が存在する。さらに表3はこれを生産地域別にまとめたものである。軽種馬の生産頭数は圧倒的に日高地方が多く(図1)、牧場も多いが、頂点のレースのみをみると胆振地方と外国産馬の割合も高いことがわかる。これは、胆振地方の軽種馬生産が外国産馬への対抗を念頭に置いて、軽種馬の高品質化に力を注いだ結果である。

価値の高いレースで好走した馬は、引退後も有力な種牡馬になることが多い。胆振地方は大きなレースで好走した後に種牡馬となった馬が多く、さらに海外から有力種牡馬も導入している。その

ため、表4に示したとおり、種牡馬数に対して種付けする繁殖牝馬が多く、種牡馬一頭あたりの種付け数が多い。ちなみに、日高など他の地方からも胆振地方の有力な種牡馬への種付けは数多く存在する。

出生した軽種馬には、出走までに数段階の育成が施される(図4)。近年の競馬では、よい血統により優秀な馬を生産するとともに、生産後の初期育成も後の成績を決める重要な要因となる。胆振地方に存在する大規模牧場では高度育成システムの形成により、効果的に育成が進められている。さらに、大規模牧場のいくつかは、有力馬主との良好な関係や安定した需要確保のためのクラブ法人(一般に一口馬主と呼ばれる小口の出資による会員を募った愛馬会法人より、馬の現物出資を受ける法人馬主)の所有もあり経営の安定が図られている。

近年の軽種馬産地では、バブル崩壊以後の景気の低迷と競馬の国際化、地方競馬の撤退に端をなして大規模牧場と零細牧場という生産者の2極化の進展がうかがえる。これが、零細牧場が多い日高地方への軽種馬生産の一極集中が緩むことと、大規模牧場が立地する胆振地方での生産割合の増大に繋がっており、北海道内における軽種馬生産は変化しつつある。

注

1) 中央競馬では、2007年より国際的な規格統一のために、国際的な格付けがなされているレースに対してグレード(G)の表記を用い、それ以外をJpnと表記している。ただし、本稿はそれ以前のデータを用いているため、2006年以前のグレード制を基準とした集計を行っている。

参考文献

岩崎 徹(2005)：『馬産地80話一日高から見た日本競馬一』北海道大学出版会。  
 小山良太(2004)：『競走馬産業の形成と協同組合』日本経済評論社。  
 進藤賢一(1977)：日高地方における軽種馬の生産構造。北海道地理, 51,13-19。  
 田林 明(1998)：北海道日高地方における軽種馬生産地域の構造。人文地理学研究, 22,79-98。  
 リンクパブリケーション(2006)：『北海道馬産地・図vol.1』リンクパブリケーション。

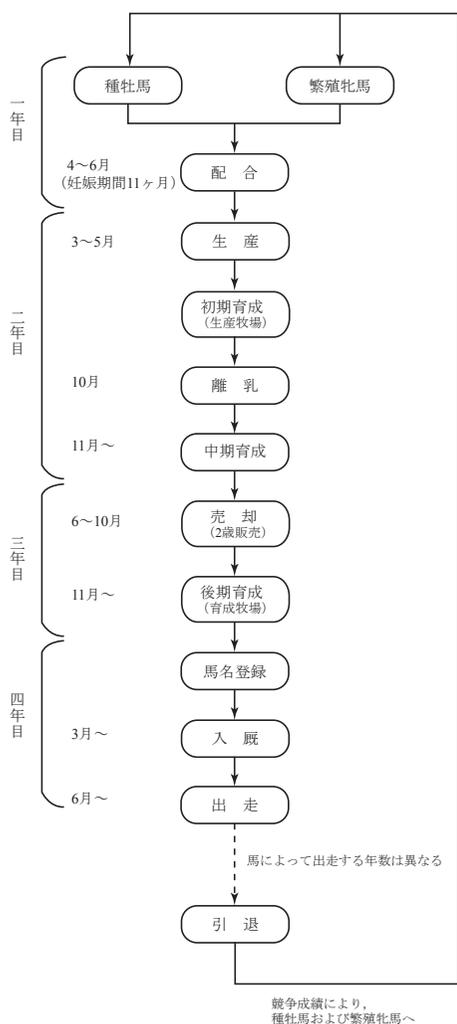


図4 軽種馬生産のサイクル  
 小山(2004)より筆者作成。